

福岡県の豊前築上地域に発生した大麦縞萎縮病について

長尾學禧・*井手宏之・**門田善士

提 義博・*正野俊郎・***筒井政弘

(福岡県立農業試験場 豊前分場・*福岡県立農業試験場畑作試験地

行橋病害虫防除所・*築上農業改良普及所)

福岡県の豊前築上地域は過去4～5年前から、ごく一部の農家に、大麦縞萎縮病の発生が認められていたが、昭和52年播種の大麦に縞萎縮病が多発した。大麦縞萎縮病の成績は多くあるが、当地域では初めて多発したので、その実態について調査をした。

1. 調査および試験方法

1) 発生実態調査：発生程度は一は場内の発生面積割合で調査し、微(5%以下)、少(6～20%)、中(21～60%)、多(61%以上)に区分して調査した。

2) 追肥による被害軽減効果：発生ほ場に4月1日に窒素0.2kg/aを硫酸で追肥し、被害解析を行って追肥の効果を検討した。

2. 調査および試験結果

1) 大麦作付面積と縞萎縮病の発生面積は第1表のとおりで、主な発生市町村は、豊前市、築城町、椎田町、新吉富村である。発生面積は県内発生面積の約98%であり、これは、豊前築上地域作付面積の約43%にあたる。発生程度別面積では発生程度多のものが全体の33%を占めた。発生面積の最も多かったのは、豊前市、次が築城町で、大麦作付面積に対して、発生割合が大きかったのは、築城町であった。築城町では、発生程度多の割合が大きく、またり病程度甚のほ場が他の市町村より多くみられた。発生分布は地域的に大きくわけて築城町と豊前市の二地域に認められた。しかし耕作者別、水系別では場所によって発生状況が異なり一定の傾向は認められなかった。

2) り病程度が甚のものは、軽のものより草丈、稈長が短く、収穫物の千粒重、1ℓ重が軽く、選粒歩合が低い傾向がみられた。そのため収量は少なく、検査等級も劣る傾向がみられた。

3) り病程度と追肥の効果は第2表に示すように、り病した麦に追肥をすると、稈長な

どに効果は認められないが、千粒重、1ℓ重が重くなり、選粒歩合が高くなる傾向が認められた。

4) 播種時期の違いによるり病程度の差は、遅播したものは、早播したものより、り病程度軽と甚の、稈長の差が少なく、穂長もわずかに長い傾向がみられた。また遅播は早播よりも、千粒重が重く、選粒歩合が高い傾向がみられた。

第1表 大麦作付面積と縞萎縮病の発生面積(4月10日現在)

項目 発生地域	作付面積 ha	発生面積 ha	発生面積 作付面積 %	発生程度別面積割合(%)			
				微 5以下	少 6～20	中 21～60	多 61以上
豊前市	611	323	53	17	21	35	27
築城町	291	203	70	18	15	20	47
椎田町	171	16	9	16	20	20	44
新吉富村	132	33	25	46	30	15	9
計	1,322	575	43	19	20	28	33
福岡県	5,643	589	10	20	20	27	33

第2表 り病程度と追肥の効果

り病程度	追肥 (4月1日)	4月1日		稈長 cm	穂長 cm	m ² 当り 全穂数 本	a当り 収量 kg	千粒重 g	1ℓ重 g	選粒歩合 (25mm 以上) %	検査等級
		草丈 cm	本数 本								
軽	無	62	758	85	5.9	751	39.4	36.9	665	77.3	2中 1下
	有	62	791	80	6.5	728	43.0	38.7	661	80.5	2下
甚	無	44	716	59	6.3	668	8.7	31.9	588	37.2	等外上 規外
	有	46	611	59	6.4	576	10.9	33.6	602	51.7	等外上

注) 病程度 軽：病斑の数が少なく萎縮程度が少ないもの
病程度 甚：病斑の数が多く萎縮程度が多いもの